Trinity

キズナエピソード\_大鳥蒼\_06

------------------------------------------

//ADV形式開始

//背景:大鳥家前

［とびお］

「よ、ひさしぶり」

［蒼］

「とびお、どうしてここに!?」

［とびお］

「最近、蒼に避けられてるからな」

［蒼］

「っ！　そんな、ことは……」

［蒼］

「……いや、そうだな。

丁度いい。もう、終わりだ。

オレ達、二度と会うのはやめよう」

［とびお］

「……なんで終わらせたいんだ？」

［蒼］

「……ずっと、

とびおの事が頭から離れないんだ」

//つぶやくように。以下情緒不安定気味に

［蒼］

「今日、後輩とデートしてきたんだよ。

でも、頭に浮かぶのはとびおの事ばかりだ！」

［蒼］

「せっかく楽しそうにしてくれていたのに、

オレはあの子を傷つけて、泣かせてしまった！」

［蒼］

「う……ぐすっ……もう、いやなんだ……

とびおの事を考えるたびに、

オレは女なんだって自覚させられる……ぐすっ」

［蒼］

「今までの自分が、ぐちゃぐちゃに崩れて行くんだ……。

女だと思わないように生きて来たのに、

とびおの事しか考えられない……」

［蒼］

「オレは今までずっと、ずっと、強さを積み重ねてきた！

誰よりも強くあろうとしてきた！

だって、弱さは周りを傷つけるんだ……！」

［蒼］

「あの子もそうだし、とびおだってそうだろ？

オレが弱くなってしまったせいで、

傷つけてしまったんだろ？」

［蒼］

「だから……終わりだ。

早く、元の強い自分に戻らないと……

ぜんぶ壊れてしまう」

//涙声で静かに告げる

［蒼］

「オレの前から居なくなってくれよ……

もう二度と会いたくない……

会えない……うぅ、うあああ！」

［とびお］

蒼は声を出して泣き出した。

今まで抑えていた感情が

間欠泉のように吹き出していた。

［とびお］

「蒼……」

［蒼］

「んっ!?　んんんっ！」

［とびお］

俺は、駄々をこねる子供のように泣きじゃくる

蒼の手を押さえ、無理矢理キスをして強く抱きしめた。

［とびお］

彼女の溢れる気持ちを全身全霊で受け止めたいと

思うと同時に、女としての蒼を肯定し、

受け入れてあげたかった。

［とびお］

「いきなりごめん、好きだ！

言わせてごめん、好きなんだ！

今までの蒼全部、今の蒼も好きなんだ！」

［とびお］

「蒼は弱くなんてなってない！

誰かを好きになったり、好きになられたりしたら、

傷つけ合うのだって、きっと普通だ！」

［とびお］

「それでも、弱くなったって言い張るなら、

俺たち二人で強くなろう！

俺はお前に傷つけられたって、全然痛くないから！」

［とびお］

「好きなんだから、二人でいれば最強だ！

な？　そうだろ？」

［蒼］

「うっ、ううっ、うぁぁ！」

//以降暗転まで泣いてる

［とびお］

蒼はなにも答えず、俺の腕の中で泣きじゃくった。

こんな蒼を見たの初めてだった。

［丹］

「……あなたがとびおくんかしら？」

［とびお］

「すいません、玄関先で……」

［丹］

「私しか居ないので大丈夫ですよ。

……今日は友達の家に遊びに行った事にしておきます。

その子を連れていってあげてください」

［丹］

「今の蒼にはとびおくんが必要なようですから」

［とびお］

「……わかりました。

俺が責任を持ってお預かりします」

//暗転

//背景:とびお自室

［とびお］

「……落ち着いたか？」

［蒼］

「うん……ぐすっ」

=========================スチルカットシーンB開始=========================

［とびお］

「蒼……俺は、蒼が女の子だから好きだよ。

俺が男で、蒼が女の子。

それがちゃんと運命だと思える」

［とびお］

「会ってから今までの蒼、今目の前に居る蒼。

全部好きだ。みんな俺の大好きな蒼だ」

［とびお］

「蒼が女の子でよかった……」

［蒼］

「うん……とびおのさっきの言葉で、

女でも良かったって、

女の子で良いんだって初めて思った……」

［蒼］

「とびお……好き……」

［とびお］

そう言うと蒼は、唇を重ねてきた。

蒼が自分を女性と自覚して重ねてきた唇は、

初めてキスをした時より柔らかかった。

=========================スチルカットシーンB終了=========================

//◆R版の場合ここでRシーン挿入

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景:白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い空間を眺める。

大きなスクリーンに、蒼との思い出を幻視する。

//次ページ

男のように振る舞う蒼。

弱き者を助ける勇ましい蒼。

楽しそうにな笑顔を見せる蒼。

そして、自分を女性として受け入れた蒼。

……そのどれもが愛しかった。

//次ページ

蒼を守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END